

中学校の部 最優秀賞

「憎しみを超えて～もう誰にも同じ思いをさせてはならない～」

広島県福山市 盈進（えいしん）中学校 3年

芳賀 友香 （はが ゆか）

2016年5月27日。日本、いや世界にとっても歴史的な日であった。米国オバマ大統領が被爆地広島を訪れた。大統領は、慰霊碑に花を手向け、数秒間、目を閉じた。

被爆者やそのご家族はこの日をどのように見たらうか。大統領は謝罪すべきだったのか。「核兵器廃絶」という同じ目的をもった者も、これに関しては意見が分かれていた。

広島・長崎で被爆した115人のうち78.3%が謝罪を「求めない」と回答していた。（『中国新聞』2016年5月23日）。広島県原爆被害者団体協議会（広島県被団協）の坪井直理事長は、「よく来てくれたと言いたい。“謝れ”はいらない」（『毎日新聞』2016年5月27日）と答えていた。坪井さんは、オバマ大統領が平和公園内でスピーチしたあと、自ら歩み寄り、最初に握手した被爆者だ。ただ、坪井さんは私にこう語っていた。「アメリカめ！よくぞ原爆を落としてくれたな！こんちくしょう！という気持ちはあるよ。でもね、そんな憎しみをあえて言わず、人類のため、核兵器廃絶のために、いっしょに力を合わせましょうと言うことのほうが大切じゃ」。被爆者の多くが、あえて謝罪を求めなかったことの重さを、誰もがかみしめるべきであると、私は思う。

謝罪を求める声もあった。広島被団協初代理事長の故・森瀧市郎さんの娘の森瀧春子さん（核兵器廃絶をめざすヒロシマの会代表）は、私たちにこう語った。「私たちの運動は被爆者の苦しみや無念を背にしている。多くの市民の命と人生を奪い、あまりにも惨（むご）い被害を与えた米国が、誤った歴史に自ら向き合うことが大切。“謝罪せよ”との要求は当然。要求しないのは亡くなった被爆者に失礼だ。」

「謝罪すべきか否か」。私はそれに正解はないと思った。だが、この夏に出会った一冊の本が、私の視野を少し、広げてくれた。それは『8時15分ヒロシマで生きぬいて許す心』。作者の美甘章子さんの祖父、美甘福一さんと、父の美甘進示さんの、原爆にあってからの人生が書かれた本だ。

「アメリカ人を憎むのは間違いだ。確かに原爆を落としたのはアメリカ人だが、アメリカ人を責めるべきではない。物事の全体像を把握することが大切だ。悪いのはアメリカ人ではなく、戦争だ」。進示さんのことばだ。進示さんは、原爆で瀕死の重傷を負い、家や家族を奪われて、将来への不安を背負った。なのに、『8時15分』をこのようにとらえた。章子さんは、父のこのような考え方のなかで育った。だからこう言った。『「アメリカを恨まないなんて、被爆者の裏切り者だ」とバッシングされたこともなにもあります。が、アメリカを恨まないからといって、父が原爆使用の正当論に同意しているわけではありません」

私は中学一年生頃から、核兵器廃絶のための署名運動に参加している。署名で街頭に立つからこそ、聞ける話がある。

「私の叔母はあの日、家の庭で洗濯物を干しとったんよ。そしたらいきなりピカッと光って、ものすごい爆風で家が倒壊したんよ。子ども二人が家の下敷きになったんよ。小さい方の子どもは瓦礫の隙間から引っ張り出すことができたんじゃけど、大きい方の子どもは、火の手が迫ってきとったけえ、そのまま残して逃げんといけんかったんよ。叔母が、ようやく火が消えて家に帰ったら、助けられなかった子どもは骨になっとったんよ。叔母は骨を集めて、布で骨を大事にくるんで、ただただ泣いたんよ。いま立っているこの場所も、あの日、何にも無くなったんよ」

どんなに想像しても、私の頭にはその光景は描けない。あの日、広島は、写真や映像で見ることができるが、それでも想像するに難しい。だが、私でもわかることが一つだけある。原爆は、いや戦争は、大切な家族、友だち、かけがえのない私たちの暮らしや未来を突然奪う。こんなことは絶対にあってはならない。

進示さんは言う。「私は、恨みつらみに重点を置き、未来ではなくて過去にしがみつ়くことには賛成しない。そんなことをしていても、何ひとつ良いことは生まれない。狭い視野で物語を語ってもだめだ。狭い視野こそが世界を戦争に巻き込んだのではないか」

そうだ。私たちは、広島被害の面だけでなく、大きな視野をもって、日本の加害の面も学ばなければならないと、私は思う。日本の真珠湾攻撃やアジアへの侵略の歴史も学び、犠牲者とその家族に、心を寄せるべきである。

「もう誰にも自分と同じ思いをさせてはならない」。これは、進示さんも含む被爆者の、復讐や敵対を超えた素朴で崇高な平和を希求する思想。私は、この思想を原点に一筆一筆、核兵器廃絶の署名を集めている。それは、あの日、記憶を自らに刻むこと、そして、市民の平和の心を集めることにほかならない。

被爆者の思想に謙虚に学ぶこと。それが核兵器廃絶の原点。『8時15分ヒロシマで生きぬいて許す心』は、そう私に、投げかけた。